

ビルの壁をながめて



谷 田 関 次

私は日ごろものの形について考えることを仕事にしているの
で、なにか唐突なことを言い出すようであるが、この日ごろの
感想を語ってみたい。

今日、町を歩いていて目に触れる大小の商業的な目的を持つ
建築、それから新しく次々に建設されてた皆さんの人々がその
中に住む高層の住宅建築、こういった建築の内部に入るまでも
なく、外からそのそそり立つ壁面を眺めただけで、それらの建
物には一つの著しい共通点のあることが目につく。それはその
立面が一定の単位の規則正しい繰り返しによってみだされてい
るということである。たとえば大きいビルの立面を眺めると、
その広い面の左の端から右の端まで、また二、三階のあたりか
ら十数階、さらには四十数階になるその最上階まで、そこには
平均した単位の繰り返しだけがある。

もちろんこのようなことは今日にわかに起こったことではな

い。ニューヨークの国連本部のビルが建ったときに、このビル
は**飾**の目建築と呼ばれたものであった。その呼び名はいうま
もなく同じ大きさの窓が**飾**の目のように規則正しく繰り返しされ
ている印象を言ったものである。そのころはことさらにそのよ
うな呼び方がされたことでもわかるとおり、まだ建築の立面と
してやや目新しくもあつたのである。

今日になって見ると国連ビルの立面どころではなく、もつと
単純化された単位の繰り返しが日常のものとなつてい
てこのような立面を持った建物は、たとえその大きさを半分に
切って見ても、高さを四分の三にとどめてみても別にどうとい
うこともない。単位の数が減るだけであつて、そのために全体
にどういうゆがみが出て来るわけでもない。

かつての建築はそういうものではなかつた。ヨーロッパ文化
の中のものだけについて見ても、建物には、したがってその立

面にも、中央の部分があり、側翼の部分があり、主たるものがあり従たるものがあった。それゆえに、一つの建物の立面はそれぞれ固有の統一を示し、全体は有機的に組織を示していた。

少なくともそれを示そうと努力していた。この場合には、建物の幅を半分に切ったり高さを四分の三に縮めることは不可能である。そのようなことをすれば統一は失われ、有機的な組織はばらばらになり、建物の生命はあとかたもなく失われてこまるだろう。

建物の立面が一定の単位の集合から成っているということは、もちろんその背後に、文字通り立面の背後に建物の中の生活、広い意味での生活があること、その生活の反映であることは明らかである。私の感想は当然そのことを含めてのものであるが、何よりもまず気になるのは、全体とは単位の集合、しかもいわば算術的な集合にすぎない、というあり方である。

単位とその算術的な集合がそのまま全体であるということに對しては、すでにル・コルビジェが一つの是正を主張した。前にあげた国連本部の建築に際して、彼は自分の考案した一種の比例尺の採用を主張したが、他の人々にいれられなかったという挿話がある。彼のいう比例尺は、現代建築が陥っている欠点を救うために、人間に即した寸法を基にして、これにある比例的变化を加えようとするものである。設計そのものにおいてそ

の理論がどれだけ成果を収めたかはやや別の問題であるが、彼の出发点をなしたものの、すなわち人間と無関係なメートルという尺度と算術的な単位の繰り返しへの反省は私たちに多くのものを示唆する。

少しわき道に入るようだが、ここで少し尺度というものについても考えてみよう。かつてはものさしというものは人間の身体と結びついていて、それは手だの足だの、また両手を広げて届く幅だのに関係していた。それゆえに歴史的なものさし、それぞれに生まれた土地を持つものさしは、互いにおよそは似通っていて、しかし少しずつ違うものであった。それはいろいろな郷土の人間がおよそは似通っていて、しかし少しずつ違うこととの現われにほかならない。近代初頭の合理主義から生まれたメートル法は、もはやいかなる人間の身体ともかかわりがなく、それゆえにこそすべての人間に共通であり得るようになった。しかしそのような考えは根底において何かを欠いているように思える。少なくとも造形の世界においては、人間そのものの表現の世界である造形の世界においては、誰のものでもないものは最後まで誰のものでもなく、誰のものでもないゆえに万人に共通なものになるといふような望みは持てない。ル・コルビジェの主張はこの点にもあった。

個性と共通性、郷土性と世界性との関係は、特定の個性をも

たないから共通性を得るとか、特定の郷土性を持たないから世界性があるとかいうものではない。むしろどこまでも个性的で、どこまでも郷土的であるものが、そのあり方で広い共感を得たときに、初めて世界性、共通性を得るのではないか。

もとの問題に戻ろう。私の出発点はビルやアパートの立面にあった。平等な単位の連続だけが全体を形づくるという今日の建物の立面の性格は、言いかえればかつての建物が持っていた有機的な全体、統一を持っていないことである。多分、このような言い方に対しては、単位の連続、その同じ立場、資格での並立こそが全体であるという反論があるだろう。しかしそれは私にとってはあまりにも形式的な反論であるように思える。どこで切ってもよく、逆にまたもつといくらでも続けてもよいというような全体というものはあり得ないだろう。

さて、私にとっての本来の問題は、そのような建物の立面が示す、あるいは象徴すると言ってもよいような、心のあり方である。私たちにあって形とはいっても心の具象化であり、心とは形の抽象であるから、そのような単位と全体のあり方は、とりもなおさず心の姿として考えられるほかはない。

近世以来のものの考え方の根底には、いつも分析されお互いから孤立してしまった諸価値と、そのような諸価値の単なる並列との姿がある。長い間私たちはそのようなものの考え方に慣

れてきた。そして人々はそれを価値の自律と呼ぶ。近代の思想は分析された諸価値の自律を極限にまで追求し、そのようなあり方を謳歌してきた。私たちの心はいわばそのように追求された互いに無縁な諸価値が一つずつの単位として並んでいるだけのものになりかけているのではないか。それは今日の建物の立面と同じように、もつと数多く継ぎ足されてもよいし、しかしまたどこかで断ち切られてもよい、そのようなものでしかないのではないか。しかもその各々の単位を形づくりそれが測られるのは、そもそも人間と無縁なメートルという尺度によってである。

私は少しおしゃべりをし過ぎたようである。私はただ毎日目に触れる建物の立面、中心もなく方向もなく、個性のない単位の羅列にすぎない建物の立面についてだけ語っておけばよかったかもしれない。しかしことに近ごろ、それらの建物の姿はもつと複雑な意味を伴って私の心を重くさせるのである。

中心もなく方向もなく個性もない、そのような形を生む心、そしてまたそのような形の中で育って行く心。そうしたことについて私なりの考えをこれからも追って行きたいと思う。

(お茶の水女子大学)